

さうゆつてむとを本歌めしあふのやまをつきか
野を守る飛火の煙もよこれハちれぬのうれわで今幾日
たのり望べよせくかりそいぞとてハ鷹をバ今いくぶりと
ろくろをへ入るごとと世はよしけこえおれの初春
此若菜つむぎの日を得んをまたしの影をやぐくる屋へ入
づきとらういふみ物へささくけりろと待と
名残をと惜むとらういふるふくらあざいとすこれ
朝来べきいとひと同じあひあハむとあら也

と記すはあはれなるひてをねつちくめれゆりてをむむる海々の里
古語に鷹の本の拙を鎌倉里と云と云ハ異名と云め也